

一・人物

【佐伯景弘（生没年不詳）】 嚴島神社の神主。平清盛に神社造営を働きかけて実現させたとされ、朝廷に提出した公文書である『佐伯景弘の解』に名を残している。これには新造する嚴島神社の仕様や後の補修に至るまで、詳細が書かれている。当然平清盛の了解のもとに作成されたものだが、清盛に関する記述は一切なく、景弘の責任における建築申請書となっている。

佐伯景弘の肖像画は現存していないが、愛媛県新居浜市、香川県観音寺市、兵庫県洲本市（淡路島）・朝来市・加西市などの「太鼓台」や「ちようさ」と呼ばれる山車の飾り幕に、佐伯景弘の刺繍絵が伝わっている。それは神主姿ではなく全て武将姿で、清盛との対で立派な髭を蓄えている。経緯については詳らかでないが、当時の景弘の瀬戸内での影響力が想像できる。

一一八二年に安芸守まで昇るが、平家が滅びた後も壇ノ浦で紛失した三種の神器を捜索する役目を得るなど、源氏の世になってもしたたかに生き延び、嚴島神社を守った。

【佐伯頼信（生没年不詳）】 嚴島神社の神主で景弘の父。佐伯鞍職に始まるとされる佐伯神主家の当主。佐伯の名はその役目が外敵から「塞る（さえぎる）」ことによるなど諸説がある。『日本書紀』の景行天皇の話に安芸国の佐伯の名が初めて出てくるが、その後安芸佐伯家は宗像との出会いもあつて嚴島神社神主となり、鎌倉時代初期に藤原神主家に代わるまで続く。

【平清盛（一一一八～一一八二）】 平安時代末期、貴族社会から武士の世に変える魁となった。『平家物語』などで悪人のイメージが強いが、海外に目を向けるなどスケールの大きな人物像を併せ持つ。同時に、当時の人々の例に漏れず、神仏に対する深い信仰と怖れを持っていた。高野山には彼が書いたとされる『血の曼荼羅』が現存している。平家の御曹司だが、実父は当時の最高権力者であった白河法皇であることは公知で、後の清盛の栄進に大いに関係があった。

【平忠盛（一〇九六～一一五三）】 伊勢平氏の棟梁で清盛の父。『平家物語』によると、護衛だった忠盛の冷静沈着な行動に感銘を受けた白河法皇が自分の子を宿した祇園女御

を下賜し、生まれた子が清盛だったとしている。当時の倫理観では忠盛にとつて非常に名譽なことでされたようである。ただ年齢からして清盛の母は祇園女御の妹とする説が有力とされる。武家ながら広い素養を持ち、武士として初めて昇殿を許された。また宋との交易で平家の基盤を確立した。

【西行（一一一八〜一一九〇）】俗名は佐藤 義清（さとうのりきよ）で、鳥羽院の北面武士として清盛と共に仕えた。文武に通じていたが、二十三歳のとき突然出家した。その原因には諸説ある。出家後は鞍馬山を始めとし、奥羽地方、高野山、中四国と諸国を巡り、吉野に庵を結んだ。旅においては無常の世を歌った多くの和歌を残し、後に『山家集』としてまとめられた。

「願はくは花の下にて春死なん、そのきさらぎの望月のころ」

【堀河局（生没年不詳）】鳥羽天皇の中宮の待賢門院藤原璋子に出仕した。璋子の落飾に従い出家し仁和寺に住んだ。女房三十六歌仙のひとつで、勅撰集などに多くの和歌を残し、小倉百人一首にも選ばれている。また、西行とも親交があったとされる。

「長からむ心も知らず黒髪の 乱れて今朝はものをこそ思へ」

【後白河天皇（一一二七〜一一九二）】鳥羽天皇の第四皇子として生まれ、天皇になれる可能性が低いとか若い頃より今様に明け暮れたという。今様とは当時流行った七五調の新様式の歌。期せずして第七代天皇になった直後に保元の乱・平治の乱の洗礼をうけた。三十二歳で子供の二条天皇に皇位を譲って院政を敷き、五代三十余年間にわたり清盛をはじめとする時の権力者と離合を繰り返しながらしたたかに生きた。深い信仰心から仏門に入り法皇とよばれた。宋との交易に共通の関心を持つ清盛に誘われて、新装なった嚴島神社を訪れた。今様歌謡集の『梁塵秘抄』を編んだ。

「遊びをせんとや生れけむ、戯れせんとや生れけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さえこそ動がるれ」

【高倉天皇（一一六一〜一一八一）】後白河天皇の皇子で、第八十代天皇。母の平滋子は清盛の妻の異母妹、中宮は清盛の娘の娘建礼門院徳子で、清盛にとつて念願の天皇外戚になった。息子の安徳天皇に皇位を譲って上皇になった直後、嚴島神社参詣が行われた。清盛だけでなく嚴島神社に

とつてもこの頃が最も栄華にあふれる時であった。しかし、参拝の翌年若くして崩御し、直後に清盛も六四歳の生涯を閉じる。

【空海（七七四〜八三五）】讃岐の佐伯家の出身。最澄と同時期に遣唐使として中国に行き、真言密教を修して帰朝し、高野山金剛峯寺を開く。唐行きの前後に気比神宮に参詣し、また遣唐使から戻って安芸国の宮島に寄って弥山を開山したとされる。後に高野山の丹生官省符神社に厳島と氣比の神を勧請していることから、空海を介した厳島神社と氣比神宮の深い因縁をみる事ができる。

【厳島内侍（ないし・生没年不詳）】平清盛が寵愛した厳島神社に侍る内侍。彼女は清盛との間に御子姫君と呼ぶ女兒をもうける。この生年が平家納経の年であることから、清盛が納経したのはこの子のためとの説がある。母親譲りの美貌で後白河院へ入内するが、間もなく没したという。

二. 寺社

【厳島神社】古墳時代から飛鳥時代への移行期である五九三年に創建されたと伝えられている。

祀られているのは宗像三神であるが、宗像は北九州を本拠とする海人族の一つで航海を生業としていた。当時、先に進出していた安曇や住吉に代わって瀬戸内海に進出し、航海安全の守り神として厳島神社を造営したといわれている。初代神主は地域の有力者佐伯鞍職で、その後佐伯家が神主を継ぐ。

弥生時代は中国長江下流やインドネシア方面からの渡来人によりもたらされた。そのうちの一部は、北九州沿岸に住み着き、海人族と呼ばれた。宗像・安曇・住吉などがその代表で、漁労と共に船を操って日本各地だけでなく大陸との交易も手がけた。厳島神社創建以前に、瀬戸内海沿岸にも海人郷があったといわれる。

『広辞苑』によると、内侍とは律令制における内侍司（ないしのつかさ）の女官であると共に、厳島神社に奉仕した巫女という特別な意味を記している。厳島神社の内侍は、京の別宮に起源があると思えるが、その後宮島に定着し、江戸時代まで厳島神社運営に携わったといわれる。

【厳島神社別宮】中山忠親という平安時代末期の公家が書いた日記である『山槐記』に、京都の平家屋敷の中に厳島神社の別宮があり、そこで安産などの祈念の儀式や神楽が行われ、内侍が仕えていたという記述がある。場所は、六

波羅の清盛屋敷である泉殿、五条坊門富小路、および西八条清盛別邸の三カ所であった。現在京都御苑の南端にある嚴島神社に當時を偲ぶことができるが、これは清盛が都の建設を図った福原にあった嚴島神社の移設といわれる。

【地御前神社】嚴島神社の外宮として、同時期に創建されたとされる。嚴島神社の真北に位置することから、方角を大事にする海人族により創られたことを示している。宮島は神の島として、少なくとも鎌倉時代まで人が住むことを許されなかったため、この外宮が重要だったのだろう。幕末まで地御前神社の沖にも鳥居があったことが知られている。

【速谷神社】創建年は詳らかではないが、安芸国開拓の祖神に繋がる飽速玉男命が主祭神である。歴史に現れるのは八一年の『日本後紀』で、嚴島神社と共に名神に列したとある。九二七年にも『延喜式』の神名帳では名神大社として安芸国の最高の社格を誇るなど、嚴島神社との神格は上下を繰り返した。

【極楽寺】奈良時代の始め、平城京の造営などで人々は重税や苦役で苦しんでいた。これをみた僧行基は貧民救済な

どの社会事業を興し、彼を慕う多くの私度僧が加わった。当初朝廷は禁圧していたが、やがて支援するようになり、この私度僧集団による活動は全国津々浦々に広がった。結局千四百もの寺院や道場を建立したと云われるが、極楽寺もその一つで、七三一年に創建されたと伝えられている。極楽寺山の山頂近くにあり、弥山山頂から、嚴島神社、地御前神社と同じく真北に位置する。

【氣比神宮】越前国の敦賀は、古来天然の良港を持った日本海側海運の要衝で、朝鮮半島など大陸との交易も頻繁に行われていた。氣比神宮は、その敦賀にある越前一の宮で、航海安全の神だった。

平忠盛が若いとき越前守であったことから、彼の進めた日宋貿易の拠点は敦賀だったと思われる。交易による繁栄から、忠盛の氣比神宮への信仰は深かった。

【祇園社】現在の京都八坂神社である。祇園社の守護神の牛頭天王（こずてんのう）は天竺で祇園精舎の神であるが、日本では神道のスサノオノミコトと習合して祀られた。当初興福寺の配下で、その後、延暦寺の末寺となったように、仏教とも強く結びついていた。そのため明治維新による廃仏毀釈で牛頭天王は廃され、八坂神社に改名された。祇園

祭は、平安末期に疫病神を退散させるため、ここから山鉾で市内を練り歩いたのが起源である。

【若一神社（にゃくいちじんじや）】清盛が熊野詣に行った際、邸内の土中に隠れたご神体を探し出して奉斎せよとのお告げがあった。探したところ西八条の別邸の築山から見つかり、鎮守社として若一神社を建てて祀った。その翌年、清盛が太政大臣になったところから、出世の神として信仰を深めたといわれる。西八条は山陽道と山陰道の拠点であり、清盛は福原に在住してからも京都に来る際は六波羅ではなくここ西八条邸に滞在したという。

【比叡山と高野山】平安時代の始め、遣唐使から戻った最澄と空海は、国家安寧や怨霊退散を願う朝廷の庇護のもとで、唐で学んだ密教とよぶ神秘主義的な新しい仏教を、怨霊を恐れる当時の貴族の間に広めた。その活動の拠点として、最澄は比叡山に天台宗の延暦寺、空海は高野山に真言宗の金剛峯寺を建立し、大いに栄えた。

三、政治関係

【院政】白河天皇は若くして皇位を息子の堀河天皇に譲り上皇になった。祭祀は天皇に任せ、政務をそのまま続けて絶大な権力を持つに至るが、この体制を「院政」という。その後の鳥羽上皇、後白河上皇、後鳥羽上皇と引き継がれ、院政期と呼ばれる。これは、ちように朝廷の権威が低下して武家の地位が確立される過渡期に当たり、鎌倉時代初期の承久の変で完全に武士の時代に突入する。

【保元の乱】鳥羽法皇の逝去が引き金になった後白河天皇と兄の崇徳上皇の跡目争いである。結局天皇方の勝利に終わるが、武家の台頭が表面化し摂関家の権威は失墜した。朝廷はこの戦で戦功のあった武士への恩賞として、清盛を播磨守、義朝を右馬権頭と同ランクに任じた。しかし義朝は自分の役職に比べ、清盛の播磨守が膨大な権益を生むことから不満を持ち、後の平治の乱につながった。

【平治の乱】後白河院と二条天皇の対立と信西や藤原信頼の勢力争いを背景に、平家に対する不満を持つ源義朝が仕掛けた政変である。結果的に源平合戦となったこの戦に勝利した平清盛は、一門の知行拡大を獲得し、わが世の春を謳歌するが、源氏側は壊滅的な打撃を被る。ただこの時、清盛が義朝の子ども頼朝と牛若丸（義経）を助命したこと

が、二十六年後の平家滅亡につながる。

【国司】七〇一年の大宝律令により、約七十の国に対して中央集権的な律令制が敷かれ、中央から派遣される国司が祭祀・行政・司法・軍事のすべてを司った。その最高位が「守（かみ）」で、租税管理も行うため役得が大きかった。国によりランクがあり、安芸守は中位。忠盛と清盛も就任した播磨守は最高位であった。平安時代末期になって律令制が崩れてくると、地方には赴かず、中央において利益を享受する、いわゆる「遙任」が多かった。

【六波羅】京都東山の麓一帯にあり、元は鳥辺野といわれた甲いの場所であった。この地が京都から伊勢や東国への街道が近くにあることもあり、当初清盛の祖父平正盛が供養堂を建立し、さらに父忠盛が六波羅密寺の境内に軍を駐留させたことをきっかけで平家の拠点となった。清盛の邸宅は泉殿とよぶ華麗な屋敷だったが、平氏の都落ちの際、六波羅密寺の一部をのぞきすべて焼失した。

【佐西郡】古代律令制で安芸国の西南部、太田川から小瀬川にいたる地域は佐伯郡（さえきのこおり）と呼ばれた。これが広域に及んだため、平清盛が安芸守になったころ佐

西郡と佐東郡に分割された。その後、江戸時代になって佐西郡は元の佐伯郡に改名され、明治時代の郡制で郡（ぐん）と呼び名は変わるが、二〇〇五年に大野・宮島両町が廿日市市と合併するまで続いた。

【唐と宋】唐は古代中国の王朝で九〇七年に滅びるまで約三〇〇年続いた。平安初期の唐は世界最高の文明国で、日本の朝廷は遣唐使を派遣し、朝貢して文物を得るだけでなく、多くの官僚や僧を派遣して最新の制度・思想・技術などを持ち帰らせた。その間空海と最澄も出かけ真言宗と天台宗を学び日本に広めた。唐滅亡の後、五代十国時代を経て九六〇年に宋王朝が起った。なお遣唐使船や宋船の瀬戸内海航路には、陸地に沿って進む当時の航法により、大野瀬戸も含まれていたと考えられる。

四．産業・運輸・その他

【水銀】水銀は、仏像などの鍍金に不可欠で、不老長寿の薬の原料としても貴重な金属だった。丹生（にう）とは、水銀の原料である辰砂の採れる場所をいうが、高野山の近くに丹生、丹生川、丹生神社などがあり、この付近に水銀鉱脈が存在したことを示している。空海は唐へ行く前に、

高野山で修行していた際、水銀鉍脈を掘り当てたとの説がある。また日宋貿易でも重要な輸出品であった。

【酒】五世紀ごろ渡来人の秦氏が京都近辺で良質な酒造りを始めており、松尾大社が守り神だったという。平安時代初期の『延喜式』によると、現在とそれほど変わらない製法だったようで、濁り酒が主流であるが、きわめて限られた階層向けながら「諸白」と呼ぶ透明度の高い清酒もすであつた。景弘の時代にも、寺院で作られる僧坊酒と呼ばれる酒が盛んに出回っていた。

【古代山陽道】奈良時代の朝廷は中国からの文物導入と権力確立のため、平城京と貿易の窓口である九州太宰府の間の道路建設を強力に進めた。古代山陽道と呼ばれる当時の最主要道路で、直線にこだわったルートが選ばれたといわれている。平安時代以降の補修が不十分で荒れてしまい、江戸時代になって新たに西国街道として再整備されたことから、当初のルートは明確でないところが多い。

【大輪田泊】清盛は大宰大弐に着任して、さらに日宋貿易を拡大させるために、大宰府を飛び越え宋船を直接畿内の港に着船させようと考えた。タライ船のような和船と違い

竜骨で喫水量の大きい宋船のために水深のある港を確保する必要がある。それが現在の神戸港につながる大輪田泊の改修で、彼が遷都を進めた福原とも近い。後白河法皇の嚴島神社参詣の際は、ここから宋船で往復した。

【日宋貿易】遣唐使の廃止以後、朝廷は窓口として九州大宰府を存続するが、対中国貿易には消極的であつた。しかし経済発展により、貴族たちの唐物需要が高まり、宋の商人による私貿易が拡大してゆく。その流れに乗ったのが平家政権で、積極的に金・銀・水銀・硫黄などを輸出し、絹・陶磁器・薬品・書籍などを輸入し膨大な利益を得た。輸入した大量の宋銭は平家の台頭を助けたが、逆にインフレを招き平家凋落の原因にもなった。

※ 注釈は、著者が史実に関する調査・研究を行い、小説の趣旨に適した内容を記載したものです。